



## 巻頭言

## 1990年代を迎えて

荻野和己\*

街頭や書店で昨年秋頃より、1990、90という数字がよく目につく。戦争と革命に明け暮れた激動の20世紀も最後の10年、1990年代を迎えた。書店に並ぶ「1990年代の世界情勢」、「日本経済1990」あるいは「90年代の世界」、「日本の時代90年代を読む」、「全予測90年代の日本」など多くの書籍は、何れも1990年代のわが国の状態を種々な角度から分析したものである。もちろん、従来からの日本を含む各国の状況の分析に関する出版も盛んである。

最近、出版された英国エコノミスト誌東京支局長ビル・エモットの「日はまた沈む—ジャパン・パワーの限界」が何かと話題になっている。かつてロンドンエコノミストによって「日本は昇った」と評価されたわが国も、今日の繁栄をいつまでも続けられず、衰退の始まる可能性が示唆されている。ただ、この書の対象とした日本はすでに現在大きく変化しており、1990年代以降に対するこの書の評価に疑義をはさむ論説もあるが、わが国の将来に予見する一つの見解ではある。

一方、米国マサチューセッツ工科大学の研究グループによるアメリカ産業衰退の原因を調査した報告書、『Made in America』もわが国で大きな話題になっている。かつての技術・経済・金融大国、アメリカの活動力の中心であった製造業の衰退は、生産力の低下によるもので、その背景には『開発と生産における技術的な弱さ』を含むいくつかの要因が指摘されている。さらに、コーエン・ザイマンの『脱工業化社会の幻想』では、副題の『製造業は国を救う』のように、国富と国力の源泉である製造業における生産技術の優位性の維持強化の必要性が強調されている。両書の論旨は、『製造業—もの作り』の重要性、その技術的優位性が強調され、今後技術立国以外にその将来を考えられないわが国にとって、大いに傾聴に値する。

かつて、戦後の東京の焼け野が原の写真に、『技術なき国の末路』と書かれたわが国。戦後40年、工業生産分野において、オイルショック、円高等、

数々の困難をのりこえ技術の向上、生産の強化に、それこそ血のにじむような努力を栄々と続けてきた。この間、わが国の製造業は、世界の多くの人々に対し魅力的な多くの製品を多量に供給し、その努力はわが国をして技術大国に、さらに経済大国へと大きな発展に結びつけたとって過言でない。まさにわが国の製造業における技術力、生産力の充実こそ、今日の繁栄のその最たる要因と考えられる。

しかし、生産、技術の問題は、これまでのように、単に人々の生活にとって魅力的な製品の開発、製造という狭い範囲だけにとどまっていることが許されない方向に向いつつある。巨大化する人類の生産活動によって、問題は全地球的な規模に拡がり、その解決は全人類の生存そのものと直接結びつくようになってきた。特に、この問題は1990年代に入りより強調されるようになってきた。

さらに90年代以降、近い将来、社会構造をも大きく変えようとする高温超伝導、常温核融合などの発見が大きな関心を集め、わが国においてもその実用化に向けての開発が進んでいる。しかし、この問題も国外で見出された原理、現象の実用化という、わが国得意の技術開発と軌を一にする。このような従来型の開発手法が科学、技術摩擦の火種となる可能性もあり、また基礎科学ただ乗り論として批判をあげていることも事実である。

このように、わが国の技術開発の手法は、いわゆる『日本二番手論』あるいは『技術の住わけ論』等といわれているが、技術大国、経済大国と認められるようになった現在、さらに90年代以降、これまでの手法のみを継続していけるであろうか。やはり、基礎的研究を含め、創造的な科学技術の開発への努力を必要とするのではないであろうか。このような努力の成果は、すでに『経済白書』に示された特許出願件数、その内容評価等によって明らかになりつつある。過去の多くの例にみられるように、ユニークな、創造的な技術の開発は、ロマンと情熱によって支えられるところも大きく、新しい創造—もの作りへのロマンと情熱、挑戦への不断の努力が、『日本の時代、90年代』という予見に対する裏付けとなるであろうことを強調したい。

\*荻野和己(Kazumi OGINO), 大阪大学工学部, 部長, 材料開発工学科, 工学博士